

古代銭貨 10世紀

下鉤東・蜂屋遺跡 shimomagarihigashi・hachiya

銭名 延喜通寶 えんぎつうほう
 貞元大寶 けんげんたいほう

初鑄年代 延喜通寶 延喜7年・907年 醍醐天皇の時代
 貞元大寶 天徳2年・958年 村上天皇の時代

サイズ 直径1.9cm 厚さ約1mm

重量 約2g

材質 銅銭ですが、鉛が多いため、白色に近い色です。

枚数 掘立柱建物の柱穴や小穴など9遺構から合計195枚が出土。

概要 出土した銅銭は、奈良時代から平安時代にかけて国内で鑄造された皇朝十二銭のうち11番目に作られた延喜通寶と12番目に作られた貞元大寶です。地鎮祭祀の為に地中に埋納されたと考えられます。



表



裏

岡遺跡出土
延喜通寶



延喜通寶



貞元大寶

拓本・原寸



▲銅銭が出土した掘立柱建物



▲壺に納入された銅銭

下鉤東・蜂屋遺跡の位置は、飛鳥時代には白鳳寺院や渡来人の集落が営まれ、奈良時代には隣接して手原遺跡に官衙が展開します。平安時代には東海道と東山道が近くを通るなど、当地域で重要な位置を占めてきました。

銅銭が出土した地点は白鳳寺院の跡地で、出土状況は、陶器に5から10枚を入れるものと、直接穴に埋設するものがあります。枚数の多いものでは、ひもに通した差し銭の状態で、77枚や51枚、33枚がまとまって出土しました。

総数195枚のうち、銭文が判明したのは延喜通寶18枚と貞元大寶9枚ですが、大きさや腐食の状況からみて全ての銭貨がこの2種類と考えられます。これら多量の銅銭は、掘立柱建物を建てるなどの土地利用に先立つ地鎮祭祀で、土地の神に捧げたとみられます。枚数が多いのも特徴的ですが、高級陶器に納入埋設した例は少なく注目されます。銅銭を入れた陶器は4点で、緑色の上薬をかけた緑釉陶器2点と灰色の上薬の灰釉陶器2点で、そのうち緑釉陶器2点は持ち手の付く水差しです。

このように多量の銅銭や高級陶器の壺を用いた地鎮祭の痕跡は、この地に財力のある豪族が存在していたことを裏付ける貴重な発見になりました。



▲灰釉陶器・緑釉陶器の壺と銅銭